

71

地方藩医の長崎遊学～伊東救庵宛て書簡の検討

海原 亮

住友史料館

報告者はこれまで出羽米沢藩を事例にとりあげ、地方出身の医家が自らの意志をもち、知識・技術を獲得する過程について考察を重ねてきた。学問上の先端は当初、京都であり次いで江戸への志向性が目立った。それは、参勤交代制に従い藩医自らが地理的な移動を余儀なくされたこと、併せて彼らの子弟たちが学問修業の場として都市を選択した結果とみなし得る。藩医たちは、目的遂行のために独自の人的ネットワークを構築した。そして一定期間の修業を経て最新の学問を地方へ持ち帰り、自領の医療環境を充実させる役割を果たしたのである。そうした動向は江戸時代を通じて確かめられるが、18世紀後半以降、洋学への関心が高まると、彼らの視座はその移入地たる長崎にも及んだ。

米沢藩では名君として知られる第9代藩主上杉鷹山の時代から、洋学を修得する気風に溢れていた。鷹山は領内に薬園を開設し、医学館(好生堂)を設け藩医育成に注力するが、さらに若手医師の他国修業を資金面から援助し、杉田玄白からオランダ製外科療具を購入、洋医書を収集するなど積極策を展開した。藩医高橋桂山(1774～1830)は、寛政8年(1796)玄白に弟子入りしたが、享和元年(1801)に藩主の内意を得て京都、次いで長崎へ遊学、蘭方外科を学んだとされる。帰国すると御側外科医をつとめ、一〇〇名余の門弟を指導し米沢の医界で主導的な役割を担った。

当地の藩医家に生まれた伊東救庵(1804～86)も、藩の方針や同僚の藩医堀内忠亮らの勧めに従い、洋学を軸とする就学につとめたことが知られる。文政6年(1823)20歳で彼は江戸遊学に出て、当時、高名を誇った眼科医土生玄碩と杉田成卿に入門をはたした。そして同9年、江戸勤学中に藩邸へ提出した願書がみとめられ、ひきつづき長崎へ遊学に出かけ、シーボルトから眼科・外科を学ぶ機会を得た。長崎には約3年滞在し、この間に高野長英・伊東玄朴・戸塚静海・伊藤圭介らと知己を得た。

米沢市上杉博物館にはこの時期、父昇廸から救庵に宛て差し出された書簡が一〇数点、保管されている。年紀がなく書簡の年代比定には慎重な検討を要するが、内容を瞥見して文政9年以降、救庵帰国までの早い時期が中心である。ただし、江戸就学の内容に関する昇廸からの指示も含まれる。救庵は遊学期間中に日記を作成し、定期的に米沢へ送付して逐一、父に成果を報告したようだ。

一連の書簡では、遊学にさいし必要な物資や資金調達、また長崎で入手すべき舶来品が細かく指示されている。とくに「蘭薬唐薬其外眼科入用具」、米沢で入手困難な手術道具・薬剤や専門書などを購入するよう迫っているが、これは当時の遊学がもつ意味を考えれば、至極妥当なことだろう。そのさい、調達資金に不足が生じれば、米沢藩「国産処」である当地の大徳寺へ依頼するようにも述べている。救庵の遊学はむろん藩の許可を得ており、ゆえに公的な金融ルートを介在させ、円滑な遊学を実現させたともいえよう。遊学費用の負担、調達法は高橋桂山の前例を参照したことも書簡の記述から確かめられる。

その一方で昇廸の言では、救庵の長崎遊学、とりわけ洋学の修得に傾倒し過ぎないよう釘をさす部分もみられる。湊長安や高良斎など著名な洋学者の事績に感嘆すると同時に、伊東家の本業たる眼科の知識・技術を第一とするよう念を押す箇所が目立つ。たとえば、ある書簡の末尾では「眼科專業ハ勿論之事ニ候、シーボルトノ大医内治・外治ニモ奇術可有候、有餘力貯以学文矣、内治・外治ニモ用心可被下事無申迄事ニ候、奥羽ノ間ニ生レテシーボルトニ随從シテ専門ノ外ニテ学得ルコトハ豈不美哉」と述べている。このあたりも当時の遊学が有した社会的意義を考える好材料となるだろう。